

# 初茜

# 宮坂静生



初茜とて鑑眞の瞼に朱  
地から立つ淑氣まろやか招提寺  
永劫といふ心眼や白椿  
初仕事歯の穴へ舌ゆきたがる  
七草粥わが溶解のとどまらず  
テロルからはじまるいくさ鬼打木

わたつみの没日むらさきちやつきらこ

フォーレクより箸の歳月花の内

夢むしるごとく目覚めぬ霜深入し

地踏鞴じだん鞴を踏み諏訪さまへ牛蒡注連

帰らざる日よ寝室に登山杖

葛根湯年の湊へ棹さすも

新雪のきらめきは身に付け難し



## 俳句における鑑賞学提言

—新春にあたり考えていくこと

宮坂 静生

いま「俳句」に求められているものはなにか。私が俳句に求めているものはなにか。そんなことを考えながら、昨年末は二つのセレモニーに出席した。そこで感じたことを記し、新年を迎えた気持を固めたいと思う。

一つは第三十六回詩歌文学館賞授賞式に出た折の寸感であり、二つは有馬朗人さんの一周忌に行われた偲ぶ会での感想から刺激を与えられたことである。

一つは第三十六回詩歌文学館賞授賞式に出た折の寸感であり、二つは有馬朗人さんの一周忌に行われた偲ぶ会での感想から刺激を与えられたことである。

一つは第三十六回詩歌文学館賞授賞式に出た折の寸感であり、二つは有馬朗人さんの一周忌に行われた偲ぶ会での感想から刺激を与えられたことである。

十六回詩歌文学館賞の授与式に参加した。そこで短歌部門の受賞者俵万智さんの挨拶を聞き、受賞のことばを読んだ。受賞歌集は『未来のサイズ』(二〇二〇・九、角川文化振興財団)であった。私はあらかじめ歌集を読んでいた。先年に歌集『サラダ記念日』を出されたことで短歌ブームはご承知の通り。今回のご受賞にも自信を持っておられ、にこやかな中にも爽やかな矜持を感じた。

そこで私の率直な感想は、万智さんの短歌が俳句に近づいてきたのではないかということである。例を『未来のサイズ』からあげる。

さらにはうなれば、短歌が俳句に近づき、俳句が現代詩のことばを自由に用いる。そのような現状を認めるならば、俳句が短歌とも現代詩とも違う、俳句独自の「俳意」はどこにあるのかと危機意識を持つて、疑問を提示される気持がわかる気がする。

以上のように、堀切さんが「俳意」の有無に俳句の独自性を見ることに固執されることは芭蕉以来の俳諧の研究者として理解できる。が、現代俳句において「俳意」とはなにかと聞え、氏ばかりではなく、明快には即答できないであろう。そこで、私は、俳句に独自性があるかという大きな問題はさておき、俳句の「特異性」と言い換えて考えてみたいのである。俳句の独自性を作り方の真正面から問うのではなく、俳句の鑑賞の仕方という、俳句のいわば裏口から、詠まれた俳句の詩情の質を問題にすることで、そこに「特異性」が認められるのであれば、それこそが俳句の「独自性」といえるのではないかと考える。題して、俳句における鑑賞学の提言である。

十一月二十九日に開かれた朗人さんを偲ぶ会でも、堀切実氏と俵万智の短歌の用語や発想が俳句に近接していることを話した。氏は俵万智以来の短歌は「俳諧化」しているといつた。私も同感であった。

そこで、堀切さんは俳句の独自性を問題にして、現代俳句で考えられていないのは「俳意」ではないかといわれる。若い俳人は俳諧的な発想よりも現代詩の詩的発想に関心を示し、詩のことばの力によって新しい発見をする。これでいいのか。

よろしいか。その本で、問題になっていることの一つに「言語の余白」をいかに読むかという問題提起がある。

ではどのようにして、表現された言語の余白を読むのか。それは、文章を前にして、直接には表現されていない余白を勝手に言い合えばいいというものではない。

余白の読みには、現実から飛躍した「ある種の実践」(同書一〇五頁)の体験がないとためだという(中島隆博・中国哲学専攻)提言に、私は、はたとひらめいたのである。たとえば論者たちは禅の体験などを考えているようだ。禅は現実からの飛躍がある。極端にいなならば、禅とは一切の現実を「無化」(ないものにする)する修行であろう。

これはあるいは私の恣意的な読みなのかもしれないが、俳句表現活動という実践は、禅に似ている。

私流にいうならば、俳句作りは、地面から一尺(三十センチ)ほど上がった次元でのパフォーマンスをするようなもの。装置は単純。十七音字の俳句詩型は切字があり、季語を用いて、全宇宙を直感する。作られたものは隙だらけの短詩だ。読みはその隙をいかに読むか。隙こそが上記の余白なのはいうまでもない。読みの大重要な点を箇条書きにしてみる。

一、表現されていることばの意味を正確に受け取る。

二、ことばの意味からイメージ(映像)が浮かぶように例などを用いて的確におさえる。

三、季語がどのように働いているか明らかにする。

四、切字の働きにより、一句にどのようなリズムが生まれた

「二月風廻り」は沖縄での春先の暴風雨として周知の地貌季語。「岳」誌友には例句が多く、俳句の世界では「うりずん」(旧暦三月の降雨に潤う季節)とともに知られている。その上で考えると、地貌季語と称しても、日本本土の平安文

化を背景にした従来の季語とは違い、季語らしくない季語、いうならば、詩のことばに近い季語が地貌季語なのである。

二月 風廻りねむれる島起こす 小熊 一人

二月 風廻り永遠の夜に近く 宮坂 静生

季語のニュースに聞く言葉「二月風廻り」に注意せよ

ここに『死者と靈性——近代を問い合わせる』(末木文美士編・岩波新書・二〇二一・八)という、題名はいかめしいがいい本がある。仏教学者の編者を含め、新進の学者五人(哲学者、文芸批評家、思想史研究者)が現代という時代が長い間無視ってきて、ここにきて大事なことであつたと氣づくような問題をあれこれ論じ合う仕掛けの本である。そんな問題を掘り起こすための本で、現代への問題提起の本とでもいえば

のか指摘する。

五、切字を中心に、ことばで表現されていない余白を明らかにする。

六、ことばから飛躍した「言葉の余白」を読み過ぎないこと。いわゆる深読みにならないこと。

以上の事項を踏まえた読みを想定している最中、鑑賞の好例に出会ったのである。例示したい。

## 地球にはすみつこのありはぐれ鷹

宮坂 静生

わたしの静生一句 ⑩0 長島 環

球体の地球に隅はないが、世界地図には隅がある。私は普段隅を意識することはないかもしない。しかし、どれほど充実した生活を送っていても、疎外感を味わうことはある。また、国内外には行政の届かない地域や人々が多く存在し、援助を求める声が限りなくある。それががまさしく隅だ。

が、掲題には「こ」と「童っこ」や「馬っこ」などと同様の親しみを表す接尾語が付く。それにより意識下の怒りや悲しみ、現実社会の不思議さも必ず消されるに違いないという明るさを感じられる。

また、姿に威厳があり、古来鷹狩に使

われて人のそばにいたのが鷹。鷹の渡りは伊良湖岬が有名だが、信州の白樺峠でも晩秋から初冬に見ることができる。その鷹の一羽が群れから遅れをとったのか、まだ空にいる。「はぐれ鷹」だ。が心配には及ばない。その鷹を休ませ、置ってくれる木や物陰があり、いつかきっと南方渡っていくに違いないと、上の十二音が思わずてくれるからだ。

転じて、勇むばかりが人の世ではない。

休んでよし、失敗よし。けれども、誰にも日当たる場所はある。作者はそう言

っているようだ。心に残る一句である。

平成二十九年作。句集『草魂』所収。

われて人のそばにいたのが鷹。鷹の渡りは伊良湖岬が有名だが、信州の白樺峠でも晩秋から初冬に見ることができる。その鷹の一羽が群れから遅れをとったのか、まだ空にいる。「はぐれ鷹」だ。が心配には及ばない。その鷹を休ませ、置ってくれる木や物陰があり、いつかきっと南方渡っていくに違いないと、上の十二音が思わずてくれるからだ。

転じて、勇むばかりが人の世ではない。

休んでよし、失敗よし。けれども、誰にも日当たる場所はある。作者はそう言

っているようだ。心に残る一句である。

平成二十九年作。句集『草魂』所収。

鷺田 清一 2187

球体の地球に隅はないが、世界地図には隅がある。

長島 環

富坂静生の句「地球にはすみつこのあり

はぐれ鷹」に同じ結社の俳人が寄せたこと

ば。隅を隅とするのは人為。地上に重要度

の仕切りを入れるのは人間だ。が、隅へと

追いやられた場所は休息のできる隅っこ

もある。「こ」という接尾語が希望を紡いでいる。一人はぐれてもいい「誰にも日当たる場所はある」と。コラム「わたしの

静生一句」第90回（「岳」7月号）から。

朝日新聞 二〇二一年十月二十八日付

2021.10.28

たまたま、私の句集『草魂』特集を組んだ「岳」二〇二一年七月号に長島環が〈地球にはすみつこのありはぐれ鷹〉の鑑賞文を書いてくれた。それを読まれた哲学者鷺田清一先生が、担当されている「朝日新聞」（二〇二一・一〇・二八）「折々のことば」に取り上げて、「はぐれ鷹」の鑑賞文の一番大事と思われる点を指摘してくださったのである。

鑑賞学の大切さの提言に、ご両人の見事な鑑賞文を頂戴できましたことに感謝申し上げたい。

## 岳創刊四十五周年 特別基金募集

俳句誌「岳」は令和五（二〇二三）年に創刊四十五周年を迎えます。前回、平成三十（二〇一八）年の四十周年記念式典は軽井沢にて盛大に行うことができました。それ以後の情勢はご承知のとおり、新型コロナウイルス感染症が世界に広がり、從来のような往来、交流に支障を来たしています。この苦難の時期を乗り越え、来年は新たに「岳」

の皆が喜びを分ち合う機会を持つことができればと念願いたします。

「岳」は「地貌」を大切にし、俳句を通して自然とともに生きる意欲を高め合うという指針を引き続き掲げます。四十五周年を迎えるあたり、実行委員会を立ち上げて記念事業を計画し、実施いたします。

つきましては事業を推進するために誌友からご支援を賜りたく、岳四十五周年特別基金の募集を開始いたします。

何卒ご協力を賜りますようお願い申上げます。

令和四年一月

一、送付先 岳俳句会  
◎口座番号 ○○五三〇一二一九三八一四 岳俳句会  
【備考】欄に「特別基金○□」と明記してください。  
\*問合せ 390-0811 松本市中央一ー一一二三一  
岳俳句会特別基金係  
電話 ○一六二二一三六一四六四六

◎今月号挿み込みの郵便振替用紙をご利用ください。  
◎口座番号 ○○五三〇一二一九三八一四 岳俳句会  
【備考】欄に「特別基金○□」と明記してください。  
\*問合せ 390-0811 松本市中央一ー一一二三一  
岳俳句会特別基金係  
電話 ○一六二二一三六一四六四六

令和五（二〇二三）年に「岳」が創刊四十五周年を迎えるにあたり、宮坂静生句碑の建立を計画いたします。建立計画が実現すれば、宮坂静生第一句碑となります。建立地は長野県千曲市、宮坂家ゆかりの曹洞宗寺院龍洞院の敷地内を候補地としています。俳句の選定等、すべてはこれから。未来に向けての楽しみとなります。

つきましては句碑建立に関わるご支援も仰ぎたくお願いいたします。お寄せ頂く基金は、右項目、四十五周年記念特別基金として受け入れ、別途募集はいたしません。ご贊同のうえ、ご支援を賜りますようお願いいたします。

## 誌友各位 記

一、特別基金 一口 1000円（何口にても可）

岳主宰 宮坂 静生  
同人会長 佐藤 映二  
事務局長 堤 保徳

宮坂静生句碑建立発起人会  
同人会長 佐藤 映二  
副会長 奥山 源丘  
事務局長 堤 保徳  
編集長 小林 貴子